

と 経営 健康

第2回

女城主・井伊直虎

講談師 一龍斎貞花

大河ドラマ「おんな城主 直虎」

初回の視聴率が、関東16・9%、関西17・3%。真田丸より低かったのは知名度の違いもあるが、開始前「直虎実は男だった」と発表した井伊美術館。

「なーんだ男だったのか」と折角アピールのチャンスに自ら盛り上がり水を差したような気がする。それも百年後の聞き書きの書、真実は？

「上杉謙信は女だった」という説が一時話題になったが、武将が女だから面白いのであって、男なら珍しくない。大河ドラマが終わってから発表した方がいいのに。

企業においても、粉飾隠しはよくないが、好機に無用の発言、行動をしないようにしてほしいものです。

桶狭間の戦いで戦死した井伊直盛の戒名が、龍潭寺殿天運道鑑大居士とつけられ、龍泰寺は龍潭寺と改めます。当主となった直親の妻日夜が待望の男の子虎松を出産。

今川家は桶狭間の戦いで義元以下重臣ごとごとく討死。人質だった元康は、己の領地岡崎へ逃げ帰り十九歳にして十二年ぶりの帰国、織田信長と手を結び家康と改めます。東三河、奥三河の今川の配下だった豪族たちは次々と家康の下へ。

跡取りの氏真は、苦勞知らずのお坊ちゃん、相変わらず蹴鞠や歌会に興じ、家臣の不満はつものるばかり。

日夜の姉二人が、東三河の西郷伊予守と、鈴木重時に嫁いでおり、義兄弟の間柄の直親は、家康についた二人と

ひそかに連絡を取り合っていた。

井伊家が家康になびいているという噂が流れるや、主家乗っ取りを狙う家老小野但馬守が駿府へ走り、直親が裏切るうとしていますと注進。

氏真ただちに直親に出頭を命令、「またか」十八年前、直親の父直満と直義が呼びつけられ暗殺されているので、家中の誰もが、「行つてはなりませんぞ」

「我等井伊家一門が生き残れるかどうかの瀬戸際、必ずけりをつけて戻ってくる」

しかし心配は適中、直親以下同行した十八名全員暗殺されてしまった。

「井伊直親、違ありて断罪、よつて一子虎松を失うべし、太守殿のご下知である」

亀之丞を殺せと命ぜられた十八年前

と全く同じ。

今川の親族である新野左馬助が、命を賭して直訴し人質という形で、虎松と母日夜を引き取ることになり、新野家は、祐圓（後の直虎）の母お千賀の実家で左馬助の妹、左馬助の妻は日夜の叔母、こうした縁続きとあってほっと一安心。子、孫、曾孫と次々と当主を失い、七五歳の直平が老骨に鞭打ち井伊家を再び束ねることになります。

「直親を殺された直平の動きがあやしい」との噂に、

「その事実ないと申すなら、武田家に通じておる犬居の天野景貫を討つて忠誠を見せよ！」

「やれやれ、また今川から命令が」直平は、途中引馬城に立ち寄り休息、

家老の飯尾豊前守が守っていたが、豊前守の息子二人が兄弟仲悪く、徳川だ、武田だという内紛から、直平毒を盛られて死去。井伊家の悲劇はどこまで続くのか。井伊の血を引く男子は、幼い虎松のみで、当主になる者がいません。

女城主、井伊直虎誕生

永禄八年正月、家臣が新年の登城。井伊家をまとめている龍潭寺住職南溪が

「我が井伊家最後の男子たる虎松は未だ五歳。そこでじゃ、元服までの間、我らを率いて頂くご当主をお迎えする」「男子は誰もおらん、誰だろう」「次郎法師直虎殿、お出ましあれ」「ハッ」と一同平伏。

正面の座に坐った直虎、「皆の者頭を上げよ。我が得度した時、南溪和尚様が、井伊家の惣領は代々次郎を名乗るところから次郎法師と名付けられた。虎松を養子にし、虎をとつて直虎と名乗ります」

「祐圓殿じゃ」「女領主など前代未聞、しかも出家

者、懸念致すであろうが、駿河の今川には寿桂尼様、義元公のご母堂で京の公家の姫君のお生まれながら女大名、尼御台とその名を轟かせられた。北条政子殿も尼將軍と呼ばれた、御一同いかがでござる」

南溪の言葉に

「次郎法師様は、井伊家の惣領でござる。幼い時から先を見抜く目をお持ちでした。異存はござらん」

ここに、三十歳の女城主井伊直虎誕生。

大名は名前の下に花押を書きますが、当時は男性が用いるものですが、直虎も花押を書き男性として振る舞っていたことがわかります。直虎の花押が書かれている唯一の実物の古文書が、浜松市博物館に展示されています。

龍泰寺（龍潭寺前名）開山の名僧黙宗瑞淵が、幼いおとわ（直虎幼名）を見て、

「この娘は、後に世を動かすに違いない」と見抜いています。

直虎は、領内を視察し農民に気さく

に声をかけて歩きます。

作物ができませんでしたと献上されると、御馳走してもてなすなど農民と融和をはかります。

村を支配していた名主や、旧家は没落。戦いで夫を失い、作物も不作とあって土地を担保に金貸しから金を借り、領民は暮らしに困窮していた。

「次郎のお屋形様、何卒お慈悲を」

徳政令を願い出てきた。

徳政とは、救済のため領主への年貢、労役の免除、借金の免除、つまり踏み倒し。領民の苦しみはわかるが、井伊家も相次ぐ出陣と、戦死した家族への保証、作物の上りも少なく、矢張り借金をして内情は火の車。

この財政に苦しむ井伊家を困らせようと、今川から徳政令を出せと命令が。これに反発する力はない、かといって徳政令を出せば税収は上らない。踏み倒された商人は困り、井伊家は金が借りられなくなってしまう。

何とか引き延ばしていたものの、不作とあって農民が城へ押しかけてくるまでになり、ここぞと但馬守がまたもや氏真に注進。

「井伊直虎統治力不足により、井伊家は地頭職より退き城を明け渡すこと。今より井伊領は、今川の直轄地とし、小野但馬守を城代とする」

「な、なんですと」

わずか四年で、領主の座を追われようとは、

「重臣以下、家臣一同それぞれ自分の領地に引きこもること。なお直親遺児虎松を引き渡すこと」

虎松を渡せば、井伊家再興は絶望となる。南溪直ちに奥三河の鳳来寺へと逃がします。

松平広忠とお大の方が、この鳳来寺に男子出生を祈願し、授かったのが家康です。

井伊谷城を追われ、龍潭寺の塔頭松岳院へと移ります。

どこまでも井伊家に忠誠を尽くそうという者たちが毎日やってくる。

「次郎のお屋形様がおられる所が、井伊家の城じゃ」

この苦境の中から、いかに井伊家を再興させるか、次回のお楽しみ。